チム旭

印刷を支え加工を活かす

Interview 46.

本社工場　マルチ部門　主任

石山 直弥（いしやま なおや）

2013年入社から中綴じ部門、無線綴じ部門、マルチ部門と様々な経験を積んできた石山直弥さん。入社当時は「覚えるのが遅く苦労した」と語る石山さんにこの8年を振り返っていただきました。

――まずは、入社の経緯を教えてください。

旭紙工株式会社には2013年4月に高校卒業後すぐに入社しました。就職活動をする中で製造業に携わる企業に就職するというのを1つの軸にし、就職先を探していました。製造業に興味を持ったきっかけは祖父です。私が小さい頃から余った木材を使って色々な小物を作ってくれていて、幼心にすごいなと思っていました。

就職活動では様々な製造業の求人票を見ましたが、当社以外の製造業は製造でも何か物の部品であったり、パーツであったり、部分的な物の製造をする企業がほとんどでした。自分が求めているのはこういうものではないなと思っていたときに見つけたのが旭紙工です。

選考過程では、工場の見学もさせてもらいましたが、機械が高速で動き、1日に何万冊も折ったり、切ったりするというのを聞いてすごいなと思いました。面接では、社長と上席3名とお話させていただきましたが、あまりの緊張で頭が真っ白になり、正直何を話したか全く覚えていません。

――様々な部署を経験したことで、今に活かされていることはありますか。

現在はマルチ部門に所属し、主に製造している商品はカレンダーです。これまで中綴じ部門、無線綴じ部門で使ってきた機械と全く異なり、技術的にも異なります。ただ無線綴じ部門に在籍したときに工場長からいただいた「どの機械にもギアやベルト、チェーンがある。何かトラブルがあったときも構造を辿ればおかしな箇所を見つけることができる」というアドバイスは現在の業務にも活かしています。アドバイスをいただく前は機械トラブルの際、なかなか原因が見つけられず時間がかかってしまっていました。部署が替わっても細かい部分で分からない箇所はあるものの、この辺りが悪いなというのが見つけられています。

――約10年にわたり当社で、仕事を継続できた最大の要因は何ですか。

分からないことを分からないままにしておかないようにしています。私の場合は、あまり物覚えが良いほうではなく、入社当時は同じことで注意されることがほとんどでした。注意されているとき、機械も止まってしまうので、周りにも迷惑をかけてしまっていると感じ、このままではいけないと奮起。少しずつでも良いので覚えられるように努力しました。やったこととしては、時間があるときに自分で機械の構造を考えながら触ることです。分からないときに先輩や上司に聞くのは簡単ですが、それではなかなか覚えられないので、自分でやってみて頭に入れるようにしていました。また、これは大事と感じたポイントに関してはメモをしっかりとるようにしています。少しでも知識を増やし、覚えることで次やるときに躓かないようにしています。

また何よりこんな私を先輩たちが的確に優しく根気強く教えてくださったというのも心折れずに続けてこれた理由です。

――では、これまで苦労した経験はありますか。

3～4年前無線綴じ部門に所属していたときのことです。韓流アーティストのチャン・グンソクのファンの方に配る30ページほどの冊子を作って欲しいという依頼がありました。納品まで1か月未満でしたが、なかなかお客様に納得していただける製品に仕上がらず、3回ほど作り直しました。お客様からのご要望はとても細かく、工場長に相談しながら、0.1や0.2といった細かい数値設定で調整したり、糊の量を減らしてみたりといろいろ試しました。最終的にはご納得いただけるものに仕上げることができました。

この経験から自分では良いものができたと思っても、お客様が納得するものを作らないと意味がないということを痛感しました。それからは手に取ってくれる人の満足を目指して業務に取り組んでいます。

――プライベートと仕事はどのように両立していますか。

マルチ部門に異動してまだ1年ということもあり、まだまだ覚えることも多く、休日はその疲れを癒すため、寝て過ごしたり、のんびりしたりしていることが多いです。もう少し経験を積み、独り立ちしたら趣味の時間も作っていきたいと思っています。

出来上がった製品を見て、大きなやりがいを日々感じている石山さん。さらなる経験を積んで、いち早く独り立ちしたいと語ります。今後、さらに成長した姿を見せてくれることに期待しています。

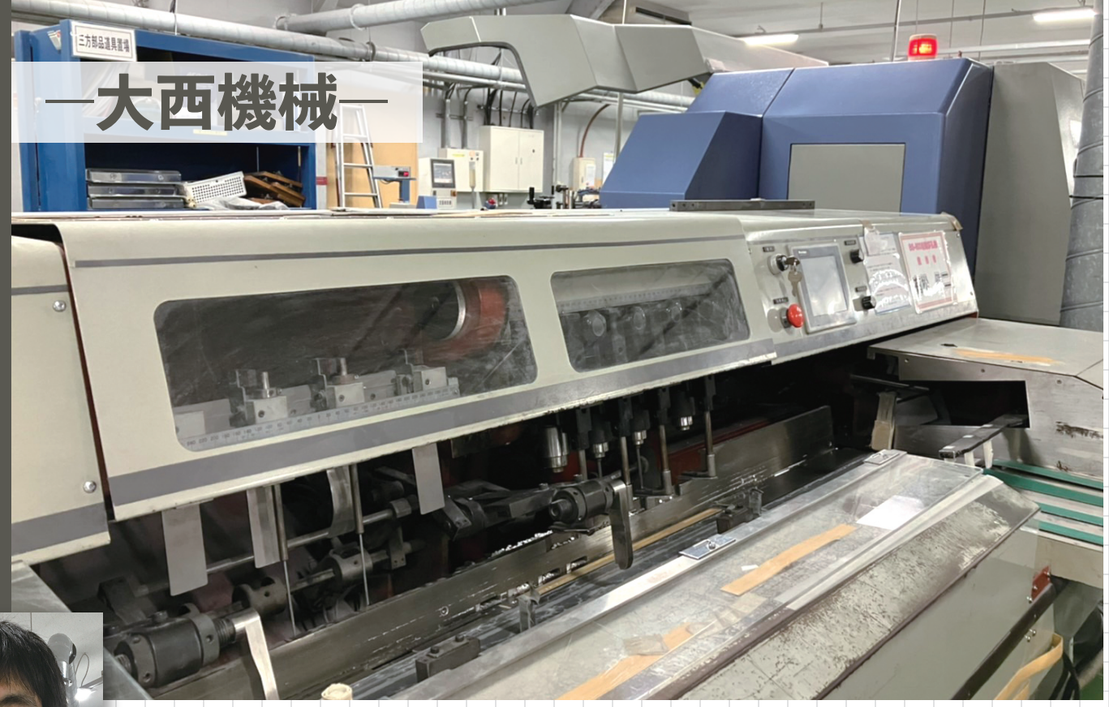
企業情報

◆創 立 年：1983年1月
　※創業：1963年
◆年　　商：14億円
◆従業員数：200人

※ 2022年2月実績

設備紹介

―大西機械―



私が紹介します！

工場本部　本社工場長
有松（ありまつ） 健二（けんじ）さん

本社工場で20年以上活躍しているという、穴開け機をご紹介します。本社工場無線部門の有松さんに、自動タイプ・手動タイプそれぞれのメリット・デメリットや、使用の際の注意点について解説していただきました。

Q. どのような機械なのでしょうか？

自動・手動の穴開け専門機

紙や本に穴を開けることに特化した機械です。メインとなるのは、ルーズリーフや製本済みのカタログにリング穴を開ける作業。自動のものと、「足踏み」というフットペダルで操作するタイプの２種類があります。１週間に一度も稼働機会がない時期もありましたが、現在は毎週活躍するほど使用頻度が増えました。

自動の穴開け機は、紙や本を投入するとセンサーが反応し、何もしなくても作業が進んでいきます。穴開けのドリルも自動で下りてきて、すぐに高速で穴開けがスタート。同一箇所に同じ穴を連続して開け続ける作業に、特に力を発揮します。
手動のタイプは、人の手で適正な位置に置き、足でペダルを踏んで操作。穴開け後の紙や本をどかすのも、もちろん手作業です。穴数の多いものなど、手で調整しながら行う作業に向いています。

Q. 現在の設備はいつ導入されたものですか？

自動・手動ともに数十年選手

自動のものは20年ほど前に導入されました。手動の方は、私の入社前からあるので、さらに昔から使われています。

Q. 使用時に注意するべきことは何ですか？

穴の位置を間違わないように注意！

製品によって穴を開ける位置や大きさが異なるので、指示通りに穴を開けなければ本がむだになってしまいます。製本作業であれば、不良やミスが発生してもリカバリーできる場合もありますが、一度開けてしまった穴をやり直すことは不可能です。そのため、単純な仕組みの機械かつ作業自体もシンプルですが、セット時の確認や、稼働中の機械の不具合のチェックなどが欠かせません。特に気を付けているのはネジの緩み。過去には、ネジの緩みが起きて穴位置がずれてしまった事例もあるので、30分に一度くらいの頻度で目視するようにしています。

Q. この設備を使用するにはどのような知識や技術が必要ですか？

比較的誰にでも使いやすい機械

慣れれば比較的誰にでも使いやすい機械だと思います。製本機などに比べると、それほど複雑な設定は必要なく、セットや調整も簡単です。ただ、ミスなく穴を開ける技術は必要なので、訓練は必須。早い人であれば、１日でマスターできます。

Q. 自動と足踏みそれぞれのメリットとデメリットは何ですか？

得意分野に応じて使い分け

自動タイプは、作業全体を速く進めることができ、穴位置も狂いにくいという大きなメリットがあります。ただその反面、キズが入りやすいというデメリットも。また、開ける穴の数が多いものについては、自動タイプでは対応できません。手動タイプは、作業速度では劣るものの、一つひとつの対象物に複数の穴を開けることが可能です。２～４個備えたドリルを使い、紙や本の位置をずらしながら、連続で30穴を開けるといった作業に使用しています。